

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

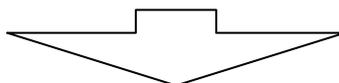
(共同研究機関等) 重慶師範大学	歴史与社会学院 教授・楊 華	長江上流周縁域の考古学文化	研究協力者
---------------------	-------------------	---------------	-------

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
アイヌ民族の信仰と社会組織	文学部・教授	榎森 進	研究分担者

(変更の時期:平成26年3月31日*定年退職)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
学術振興会・特別研究員	文学部・准教授	竹井 英文	研究分担者

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究プロジェクトの目的は、周縁域地域住民の歴史意識の変化、資料処理技術の格段の進歩、開発・災害などによる文化財の大規模な変容と亡失といった新時代の状況にこたえて、日本東北部・中国西部・韓国島嶼部などの周縁域の歴史事象のなかから、とくに祭祀習俗・信仰組織などの宗教文化事象をとりあげ、それら宗教文化事象が周縁域の社会と文化の形成と維持に果たした役割を日中韓比較文化史の観点から解明して、新しい日中韓周縁域宗教文化史を構築し、その研究成果を広く国内外に提示するとともに、周縁域の一地方拠点としての歴史をもつ仙台に、日中韓周縁域史研究の研究拠点を築くことにある。

したがって、内容においては、中央による周縁支配のための機能という単眼的な歴史観を克服して、周縁域住民社会の自律的な維持と展開に在り宗教文化がいかに有効に機能していたかを、住民の自立意識と主体意識に十分に考慮して解明を試みる点、方法においては、資料の収集・保存及びそれらの資料による研究の全工程を有機的に完遂しうるシステムを、地方私立大学に構築し移動しうる点が、そのもっとも大きな意義である。

この目的と意義を実現するため、5ヶ年の研究計画をおおよそ次のように定め、プロジェクトを推進した。一. 東北沿岸部の各自治体、中国重慶師範大学、韓国済州大学校など、日本東北周縁域、中国西部周縁域、韓国島嶼部の拠点に位置する各組織と研究連携を築き、この三つの周縁域を例にとり、資料の収集・復原・整理・保全及びそれを利用した日中韓周縁域社会における宗教文化構造の歴史的研究を推進する。あわせて、他の周縁域にも対象を広げ、同様の研究を推進する。二. 大学博物館・大学院アジア文化史専攻と連携して、文書資料・碑文資料・有形民俗資料・無形民俗資料について、最新の資料処理技能を駆使して復原・撮影・保存・解読の作業を推進する。三. さまざまに試みられている周縁域宗教文化の研究視点が、住民の歴史意識とどのようにかかわっているか、その現状を現地調査などを通じて確認し、その意識に見られる日中韓相互の類似点と相違点を明らかにする。四. プロジェクトによる研究成果と収集・整理した関連資料を、研究論文・調査報告・公開シンポジウム・公開展示などで広く公開する。五. 宗教文化分野にとどまらない、全分野をカバーする日中韓周縁域史研究のネットワークシステムを構築し、学内外の使用に供するとともに、研究連携のより一層の充実をはかる。六. 大学院生を指導して、資料の選定・図版化と解説の執筆を担当させ、大学の教材としてはもちろん、一般市民の使用にも適する「周縁域考古民俗資料ハンドブック」を編集・刊行する。

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

(2) 研究組織

文学部歴史学科教員 12 名・経済学部教員 2 名・経営学部教員 1 名、計 15 名の教員を研究メンバーとし、研究代表者(アジア史)及び日本史・考古学・民俗学・経済史各 1 名の幹事、計 5 名が運営委員会を構成している。15 名は、すべてアジア流域文化研究所の研究員である。研究メンバーの研究活動は、研究代表者と運営委員会が有機的に統括し、研究テーマの設定・経費の使用計画・公開行事の開催計画・国内外研究者の招致などにおいて、日本史・アジア史・考古学・民俗学・経済史の間で、また文献資料・考古資料・有形民俗資料・無形民俗資料の間で、活動に過不足が生じないように配慮した。事務局はアジア流域文化研究所におき(常勤職員 1 名・非常勤職員 1 名)、大学博物館事務部(常勤職員 1 名)と連携しながら諸事務を担当した。研究所の総会は年 1 回であり(年度はじめ)、予算と決算・活動の報告と成果などについて審議した。

アジア文化史専攻大学院生の研究活動参加については、博士後期課程の院生(毎年度平均 2 名が在籍)と博士前期課程の院生(毎年度平均 5 名が在籍)全員を学外調査の立案・運営にかかわらせ、後期課程院生をリーダーとして、在籍する全院生を学外実習に参加させた。そのうち 5 回は国外(中国 3 回・韓国 1 回・ロシア 1 回)であり、いずれも院生による調査報告を公開している。

また、重慶師範大学・朝鮮大学校・済州大学校などとは恒常的に研究連携を実施してきており、十数回にわたって相互に往来して共同で現地調査・シンポジウムを実施するなど、実質的に国外共同研究機関の役割をはたした。さらにこの 5 年の間に、アジア文化史専攻では 7 名の外国人客員教授(朝鮮大学校・武漢大学・重慶師範大学・復旦大学・中国社会科学院考古研究所)を招致しており、このうち正規の研究協力者に任用したのは重慶師範大学楊華教授のみであるが、他の 6 名も逐次委嘱されて研究活動に従事し、実質的な研究協力者の役割をはたした。

(3) 研究施設・設備等

主たる研究施設はアジア流域文化研究所(98 m²、2016 年 8 月の新棟移転以降は 54 m²)であり、大型デジタル機器 4 件をはじめとする電子機器が、プロジェクト開始以前から完備しており、本プロジェクトにおいてもその機能を十分に果たした。使用する人数は、毎日およそ 4、5 名であり、公開行事前後には毎日 10 名をこえる教員・院生が使用する場合もあった。大学博物館が副たる研究施設であり、資料の撮影・録音・公開展示などの作業をになった。博物館には解説員も兼ねて、毎日院生 1 名が学芸研究員として常駐している。その他、三次元測量機器などを保有している考古学研究室、高性能な撮影・録音機器を保有している民俗学研究室が、補助的な研究施設として院生の研究活動・実習活動に供されてきた。学外の研究者がこれらの研究施設を利用したのは、年間のべ 20 名ほどであり、その目的は大半が所蔵資料データベースの調査であった。なお、以上の施設は一部制限つきではあるが、学部学生も使用可能であり、演習・講読などの講義に使用されることもあり、学部学生が本プロジェクトの内容にふれ、教員がその内容を教育資料に応用する有効な場となった。

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

この項については、(1)目的・意義・計画の項にかかげた一～六の計画内容にしたがって、まずそれぞれの研究成果の概要を記述することにした。

一. 日本東北周縁域・中国西部周縁域・韓国島嶼部及びその他周縁域を対象とする研究。

1. 東北周縁域。内陸部の栗原市や沿岸部の石巻市・鮎川町・松島町の自治体・文化財関連機関などと連携し、資料の収集・整理・保全及びそれを使用した周縁域の歴史・文化・民俗研究を推進してきた。おもな成果は次の通りである。①古代東北周縁域史研究の重要課題である蝦夷(エミシ)の研究を進め(*1)、その分布範囲・生業・信仰及び中央政権との関係などを明らかにするとともに、歴代の中央政権と周縁域在地勢力の接触・拮抗の様相を民俗学資料と考古学資料によって明らかにした(*2)。②碑文資料により、中世～近世期宮城県東部沿岸地区における仏教信仰の状況を明らかにした(*3)。③三陸沿岸の近世～近代期豪商が、在地の経済・社会・信仰などにはたした役割を明らかにした(*4)。

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

2. 中国西部周縁域。重慶師範大学歴史与社会学院などと連携し、重慶市区・湖北省清江流域・貴州省中部・重慶東南烏江流域などで資料収集・現地調査を実施し、とくに西部周縁域の少数民族である古代の巴族と近世～近代の土家族について、その社会と信仰の状況を考察してきた。おもな成果は次の通りである。①古代巴族を構成する各種族のそれぞれの崇拜神相互のありかたは、相互に優劣がなく相互に崇拜を容認し合う、きわめて平等的なものであったことを明らかにした(*5)。②近世～近代土家族においては、外来の崇拜神の流入に寛容でありながら、自己本来の崇拜神に対する矜持がきわめて強く、外来の崇拜神が本来の崇拜神に同化・一体化されていく傾向があったことを明らかにした(*6)。

3. 韓国島嶼部。済州大学など連携し、済州島の民間習俗の現状調査を実施し、その社会的機能の歴史を考察してきた。おもな成果は次の通りである。①済州島の民間海神祭祀ヨンドウングツの祭祀内容と社会機能を現地調査して、住民の土着祭祀に対する強い矜持や在地生業の維持に果たしている役割などを明らかにした(*7)。②韓国の宗教史において、国家的・全国的な信仰に動揺が生じた際に、周縁域在地信仰の有効性が再認識・再評価される場合が多かったという、学術上の認識を獲得することができた(*8)。

4. その他の周縁域。

a. 九州南部島嶼部。鹿児島大学などと連携し、九州南部の離島で民間習俗の現状調査を実施し、その社会的機能の歴史を考察してきた。おもな成果は次の通りである。①民間祭祀が漁業生産の維持に果たしている役割などを明らかにした(*9)。②仏教信仰と在地民間信仰の相克と習合の状況を、仏教信仰組織の消長と関連づけて明らかにした(*10)。

b. 中国西北—ウイグル地区。中国王朝のウイグル地区支配や、ウイグル族の移住と信仰組織の整備などの問題をとりあげ、新疆ウイグル自治区のウイグル族社会におけるイスラム教信仰と他信仰・他文化の関係を考察してきた。おもな成果は次の通りである。①ウイグル族が中国王朝の管理に対峙するにあたって、彼らのイスラム教信仰がどのように作用したかを明らかにした(*11)。②イスラム教信仰の聖地であるマザールの設置と機能について、その歴史的推移を明らかにした(*12)。

その他にも、ロシア東部周縁域での民族宗教事情の調査(*13)、中国浙江省山間部での宗教演劇の発生と展開についての調査、北陸地区での塩業民俗資料の調査などを実施して、周縁域宗教文化史研究の資料的類例を収集し、周縁域相互の比較・検討に有効な知見を提供した。

5. 関連する個別研究。

a. 日中韓周縁域塩神信仰の比較研究。塩産地は周縁域に位置する例が多く、したがって塩神信仰も周縁域信仰の一つであることに注目して、日中韓各地の塩神信仰の歴史と現状を調査し、塩神信仰が周縁域社会で果たした役割を考察してきた。おもな成果は次の通りである。①日中韓各地の塩神信仰の歴史と現状についての基本的理解をうることができた(*14)。②日本の塩神信仰においては、対象となる神格のほとんどが塩土老翁神(シオツチオジノカミ)であり、しかもそれらのほとんどが国家的祭祀の神格と習合化・一体化していつているのに対して、中国のそれは多種多様な神格が祭祀対象となっており、しかもその独立性はきわめて強く、国家的祭祀の神格と習合化・一体化することがきわめて少なかったという、興味深い対比を明らかにすることができた(これについての論著は現段階で未公表である)。

b. 宮城県東部海岸域東日本大震災被災地における文化財復旧作業と住民の在地伝統文化に対する意識調査。石巻地区・牡鹿半島地区で復旧作業と意識調査を実施し、大災害によってはからずも明らかになったあるべき文化財保護のありかたと、平時はほとんど外部に表明されることのない在地伝統文化に対する住民の意識を調査・検討した。おもな成果は次の通りである。①災害で破壊された文化財を復旧し、復原・整理・保存するとともに、現地住民にあらためて公開することができた(*15)。②生業や祭祀に対する現地住民としての意識を聞き取り調査し、意識の地域的な特色やその変化の様相を明らかにすることができた(*16)。

c. 移住民とその信仰に関する研究。近世以前は北から南への移住民が大量に流入し、近世以

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

降は東から西への移住民が大量に流入した中国西部長江上流地区をとりあげ、原住地信仰の移住先への流入とその変容の過程を考察してきた。おもな成果は次の通りである。①長江上流重慶地区における、移民にともなう信仰の流入とその変容の過程を、通史的に明らかにした(* 17)。

②近世以降の重慶地区において、移民とともに流入した信仰が、従来の在地社会にどのような影響を与えたかを明らかにした(* 18)。

d. 仏教東漸の様相とその変容の研究。仏教東漸の様相とその東漸過程における変容を、おもに仏教施設の様相を資料に考察してきた。中国→韓国→日本中央部→東北周縁域という伝播経路上の仏教施設を比較検討して、伝播と変容の様相を明らかにしたのが、おもな成果である(* 19)。

以上の研究は、地域の信仰・祭祀が社会組織の維持にどのように役立っているか、住民の生活意欲の更新と向上にどのように役立っているか、外部から流入した信仰・祭祀とどのようにかわり、それとどのように習合していったか、その神格が地域の産業神とどのようにかわっているか、中央からの政治的社会的宗教的支配・統制とどのようにかわっているか、住民社会内部の有力者・非有力者関係とどのようにかわっているか、などの視点に立って推進してきたが、いうまでもないことながらそれぞれの周縁域の間にはその様相に類似もあれば相違もあることがあらためて明らかになってきている。多くの場合周縁域が少数民族区でもある中国では、信仰・祭祀のありかたに民族の生来的な種族意識・社会意識が強く反映しており、そのことが周縁域宗教文化の様相において、少数民族がほとんど存在しない日本・韓国周縁域との間に、相違をもたらす原因の一つとなっていること、周縁域といっても、気候・生業などの違いがあるのは当然であり、そのことが各周縁域宗教文化の間に相違をもたらす一つの原因となっていること、周縁域といっても九州南部島嶼部のように日本の周縁でありながら大陸の周縁でもある地域か、そうでなく一方向だけからみての周縁域である地域かという地勢上の違いが、各周縁域宗教文化の間に相違をもたらす一つの原因となっていること、そして、中央からの支配・統制の強弱の差が、当然ながら各周縁域宗教文化の間に相違をもたらす一つの原因となっていること、こういった点である。以上の点を考慮しながら、もし他の条件や要素を無視して、ただ単に信仰・祭祀における住民の自律性・自立性・矜持性・優位性の現れかたを比較するならば、相対的なものではあるが中国の周縁域がもっとも強く、次が韓国の周縁域、次が日本の周縁域というのが、得られている一つの認識である。

もっとも、この認識の当否は学術上きわめて重要な問題であり、これを公表するにはさらに比較研究を続けなければならない。シンポジウムや講演などにおいてこの認識に言及することはあっても、いまだ論著でもって公表していないのはそのためであり、今後数年の研究をへたしかるべき段階で、論著でもって正式に公開したいと考えている。

本計画一の達成度は、およそ8割と考えている。

二. 最新の資料処理技能を駆使した、関連資料の復原・撮影・保存・解読。

1. 東北地方周縁域の宗教民俗資料はもとより、宮城県沿岸部の水没宗教碑文資料(* 20)・紀伊半島西部近代民俗資料(* 21)・九州南部離島部の祭祀資料(* 9)などの検索・復元・撮影・保存作業を実施するとともに、中国長江上流重慶地区・貴州省北部地区・湖北省西部地区(* 22)及び韓国濟州島の現地(* 23)において関連資料を収集・撮影し、その復原・整理・保存を実施してきた。

2. 東日本大震災によって亡失した文化財の検索・復旧は、おもに民俗学教室が組織した文化財レスキュー隊がこれを担当し、石巻地区・牡鹿半島のそれらについてほぼ網羅的な検索・復旧・撮影・保存を実施した(* 24)。

以上の資料はデータベース化されて保存されるとともに、閲覧・公開行事・博物館展示などによって学内外に提供されている。ただ、その提供先は現在のところほぼ国内に限定されており、中国や韓国などの研究者・研究機関に提供するシステムを構築しえないでいる。

周縁域歴史・文化比較研究資料の有効なデータベースを集積しながら、それを国外に提供しえ

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

ないであるから、本計画二の達成度は、およそ7割と考えている。

三. 周縁域史研究の研究視点に応用すべき住民の歴史意識の調査。

地域住民の歴史意識を直接調査するというのは、方法上困難な作業であり、公開行事・資料収集・民俗調査の際の聞き取りなどの方法に限定されざるをえなかった。それでも、中央と周縁域の経済的格差が消滅していつているにもかかわらず、むしろ格差が消滅していくことが、かつて格差が存在したことをかえって意識させているという事情、地元の信仰や祭祀への矜持が、実は中央の文化や芸能に対する憧憬や劣等感と裏腹の関係にあるという事情が、どの周縁域においても多かれ少なかれ存在していることを確認することができたし、そういった事情は日本の東北地方周縁域ではより強く現れており、中国西部の周縁域ではそれほど強く現れていないという対比も確認することができた。これは周縁域史研究の視点に応用すべき重要な情報であり、この情報を常に念頭において研究を進めるべきことが、研究メンバー共通の理解となってきている。

なお、一・五・bで記した東日本大震災被災地住民への在地文化に対する意識調査は、結果として、東北周縁域における上述の格差意識が被災によってより鮮明になったことを確認せざるをえないものとなったが、一方でそのような事態をも一種の忍耐によって克服するのが周縁域住民の伝統的な心性であるという、矜持の歴史意識が強く存在していることを再確認するものにもなった。この意識調査は民俗学の大学院生・学部生が四年にわたって実施したものであるが、その内容は本研究プログラムの研究視点に重要な示唆を与えることになった。意識調査に参加した大学院生自身が、被災地の宗教芸能を題材に修士論文を完成させたのは、その成果の一つである。

ただ残念なことに、以上のように重要な住民意識の残存を明らかにしながら、研究メンバーがこの意識自体を対象とする研究論著を公表しえないでいる。したがって現時点における本計画四の達成度は、5割と考えている。

四. 研究成果と収集・復原・整理した資料の公開。

13・14 の項目に示した通り、本研究プロジェクトの研究成果と収集・復原・整理した資料は、研究論著・研究発表・公開シンポジウム・公開展示などによって積極的に公開してきている。そのうち、公開シンポジウムなどの国内開催は都合 29 回であり(うち学内 26 回・学外3回)、国外では 2013 年度に重慶師範大学を会場に国際シンポジウム「日中韓周縁域の考古文化と民俗文化」を共催したほか、研究メンバーが中国・韓国研究機関主催のシンポジウムで、のべ 16 回にわたって講演などを実施してきている。また公開展示については、民俗資料を中心に大学博物館・仙台市メディアテーク・石巻市と鮎川町の市街施設などで、数回にわたって資料の展示を実施した。

こういった公開シンポジウム・公開展示では、関連研究者はもとより、一般市民からも本プロジェクトの視点・方法などについて直接意見を寄せられることがあり、なかには文書・器物よりも資料価値の高い口承伝承の提供を受けた場合もあった。

公開の手段・回数も十分であり、それに対する研究者・市民の反応も十分であり、したがって本計画五の達成度は、およそ9割と考えている。

五. 宗教文化分野にとどまらない全分野をカバーする日中韓周縁域史研究のネットワークシステムの構築。

重慶師範大学歴史与社会学院をキーステーションに、重慶市区・烏江流域・貴州省北部・湖北省西部などの大学・博物館などと恒常的に交流可能な連携システムを構築してきており、長江上流周縁域史研究の連携体制には十分なものがある。また武漢大学歴史学院・襄陽博物館との連携など、長江中流周縁域史研究の連携体制にも十分なものがあり、復旦大学文物与博物館系との連携など、長江下流周縁域史研究の連携体制にも十分なものがある。韓国では、済州大学校・朝鮮大学校・国立海洋文化財研究所などと恒常的に交流可能な連携システムを構築してきており、韓国南部周縁域史研究の連携体制も十分である。国内では、東北各地の自治体・博物館・文化財関連施設との研究交流が恒常的に実施されているが、アジア文化史専攻修了生十数名が各地に文化財専門職として勤務していて、研究交流をより実質的により有効に推進することが可能となっており、東北地方周縁域史研究の連携体制も十分である。さらに、鹿児島大学国際島嶼教育

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

研究センターとの研究交流を開始するなど、東北地方以外の周縁域研究拠点との連携体制も整備されてきている。

この日中韓周縁域史研究の連携体制は、相互にきわめて密接なものであり、中国・韓国の研究者・院生との東北周縁域や長江上流周縁域での合同現地調査をきわめて容易に実施しえたなど、本研究プロジェクトの推進に大きな作用を果たした。現在、5年間の連携内容を集約した「東北学院大学アジア流域文化研究所・日中韓周縁域史研究連携システム」という小冊子を編集中であり、おってホームページなどで公開し、学内外の使用に供したいと考えている。この計画五の達成度は、およそ9割と考えている。

六.「周縁域考古民俗資料ハンドブック」の作成。

研究メンバーが院生を指導しながら集積・整理した資料群は膨大な量にのぼり、いまだ「周縁域考古民俗資料ハンドブック」を刊行しえないでいる。集積・整理した資料を博物館実習の教材にするなどして取捨選別を進め、教員・院生からなる編集委員会のもとで、5年以内をめどに刊行する予定である。この計画六の達成度は、およそ3割と考えている。

以上一～六の計画による研究の推進とその成果については、全体を総合して、達成度は7割5分であると自己評価している。

＜特に優れた成果が上がった点＞

一. 研究活動における特に優れた成果。

1. 日本東北周縁域・中国西部縁域・韓国南部島嶼部及び九州南部島嶼部・中国西北部一ウイグル地区などにおける宗教文化構造の様相を、とくに信仰・祭祀を対象として、歴史的経緯とその経緯に対する住民の歴史意識に留意しながら考察し、相互の相違とその相違をもたらしている住民意識の相違について、基礎的な理解をうることができた。

2. 中国西部周縁域の信仰・祭祀においては、それぞれの地域・民族が崇拝する神格の独立性がきわめて強く、国家的祭祀の神格と習合化・一体化していくことがきわめて少なかったのに対して、日本東北部周縁域などでは、その独立性が相対的に弱く、国家的祭祀の神格と習合化・一体化していくことが比較的多かったという対比を明らかにすることができた。その強弱は、当然ながら信仰・祭祀の裏面に存在する住民の歴史意識のありように対応しており、住民意識に留意した日中韓周縁域宗教の比較文化史的研究に一つの貴重な示唆を与えることになった。

3. 周縁域住民の信仰や祭祀の維持と発展に対する意識の強さは、地域特有の生産物や生産技術に対する矜持の意識と表裏一体の関係にあることを確認した。日中韓の塩神信仰とその祭祀にみられる諸事情がその一例である。周縁域宗教文化史の研究には、特有生産物と生産技術に対する信仰と祭祀をとくに対象にとりあげるべきであることを、再確認することとなった。

4. 周縁域特有の信仰と祭祀が、中央の国家行事に取り込まれることによって、いわば公認化され、その公認化が現地住民の信仰・祭祀に対する矜持意識をより強固にしていくとともに、一方で、国家の管理・統制によって、その意識が非実質化・形骸化されていくことを明らかにした。しばしば指摘される常識的なことがらではあるが、これをあらためて確認することができた意味は大きいし、またその非実質化・形骸化の程度において、中国西部周縁域と日本東北部周縁域などとの間には無視しがたい相違があることを確認しえたことの意味も大きい。

5. 現地調査を積極的に推進するなかで、既存の文献資料を収集しえたのはもちろん、民間伝承などの口承資料を大量に収集・復原・整理することができた。信仰・祭祀の機能やそれを支える住民意識を考察するうえで口承資料はきわめて有効であり、上記2の住民意識における中国西部周縁域と日本東北部周縁域の相違などは、聞き取りした口承資料によって、より明らかになったものである。

二. 研究体制における特に優れた成果。

1. 機能上きわめて有効な日中韓周縁域史研究のネットワークシステムを構築することができた。国内外のどの研究者・機関とどのような連携が可能になっているかについては、上述した現在編集中の「東北学院大学アジア流域文化研究所・日中韓周縁域史研究連携システム」によって公

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

表する予定である。

2. アジア文化史専攻の大学院生を積極的にプロジェクトに参加させ、研究能力の涵養や研究意欲の向上に資するとともに、就職に必要なキャリア形成に資することができた。中国3回・韓国1回・ロシア1回の海外現地調査にほぼすべての院生が参加したのをはじめ、資料の復原・整理・保存作業にもほぼ全員が取り組んだ。博士後期課程の修了生2名が仙台市と秋田県大仙市の文化財課に、前期課程の修了生1名が東北歴史博物館に、前期課程の退学者1名が宮城県気仙沼市の文化財課に、それぞれ専門職として就職しえたのはその成果の一つであり、しかも彼らによって東北地方周縁域史研究の新たな情報と資料が提供されるという、相乗効果が生み出されている。

<課題となった点>

1. 本プロジェクトの課題は「周縁域社会の宗教文化構造研究」であるが、周縁域史研究全体の研究状況を学説史的に把握することから研究活動を開始したためか、その対象がいきおい政治・経済・文化・宗教・民俗・民族など、ほとんどすべての分野に拡散することになってしまい、研究メンバー全員が多くの分野の研究に時間と労力を費やさざるをえなくなって、本来目的としていた宗教文化構造の分野に、メンバーが一致して研究活動を収束していくことが困難になってしまったことが、最大の課題である。

研究メンバーはさまざまな分野で、すでに相応の周縁域史研究の実績をもっており、したがって今回のプロジェクトでは、一度研究分野を宗教文化構造に集中・収束させて共同研究の実をあげることによって、それぞれが試みてきた方法や視点をより深化させ、そして結果として宗教文化構造をふくむ全分野をカバーする日中韓周縁域史研究のネットワークシステムを構築するというのが、本来の目論見であった。しかし、上述したように確かに全分野をカバーする機能的で有効な研究ネットワークシステムを構築しえたものの、しかし、それは宗教文化構造研究への集中・収束という中間作業が必ずしも十分でないままに構築されたものなのである。もちろん、この研究ネットワークシステム自体に大きな不備が存在するわけではないが、「周縁域社会の宗教文化構造研究」という課題を全面的に推進することができなかつたことは否定できない。先にあげた計画一の自己評価において8割、計画一～六全体のそれにおいて7割5分という評価をかかげているのは、この不十分さを考慮したことが、一つの理由になっている。

この課題は、メンバー全員が十分自覚しており、5年のプロジェクト期間は過ぎてはいるけれども、期間中に集積した資料を活用しながら、今後周縁域宗教文化構造の論著を逐次公表することでもって、この課題を少しでも補っていきたいと考えている。

2. 日本・中国のそれに比べて、韓国周縁域での現地調査が必ずしも十分ではなかつた。渡航に際しての安全性を考慮して、大学院生の現地調査を見送らざるをえない事態が生じたのが理由であるが、予定した調査回数を消化することができなかつたのは残念であった。今後、現地と十分に連携しながら大学院生を参加させた現地調査を実施し、この課題を少しでも補っていきたいと考えている。

<自己評価の実施結果と対応状況>

研究所総会・運営委員会での自己評価が公的な自己評価の場であるが、実質的にはメンバー全員で逐次自己評価を実施した。まず問題となつたのは上述した通り、①メンバーの研究対象が多分野にわたりすぎ、宗教文化構造という分野に収束していくことが見込めないというものであった。これについては、研究代表者のリーダーシップのもとにできるだけ収束化をはかるという対応と、収束化が不完全に終わったとしても、それを研究期間終了後の研究活動によって、さかのぼって補うという対応をとることとし、現在にいたるまで相応の対応効果をあげてきている。もう一点は、②シンポジウムなどの際の通訳や資料翻訳が不十分であるというものであった。これについては、メンバーが十分な事前準備を行うとともに、中国人留学生や韓国人留学生に業務を委嘱するという対応をとることとした。現在にいたるまで相応の対応効果をあげてきている。

<外部(第三者)評価の実施結果と対応状況>

とくに外部評価機関を設置しなかつたが、東北大学などの国内学術機関、重慶師範大学・朝鮮大

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

学校などの国外学術機関の関連研究者から逐次評価を聴取し、いくつかの評価に対応した。もっとも重要な評価は、①このような重要で大きな課題を処理するには、研究期間が短すぎ、研究経費が少なすぎるといったものであった。これに対しては、期間中最善の努力を傾注するだけでなく、期間後もある程度の自己経費でもって数年間は研究を継続し、所期の目的を完遂する予定であるという解答でもって対応した。この対応処置は今も継続している。また、②シンポジウム会場のほとんどが学内に限られ、研究成果が十分外部に公表されていないのではという指摘もあった。これについては、期間終了後にはなるが、国内外の他の周縁域研究機関と連携して学外各地で関連シンポジウムなどを共催するとともに、研究論著でもって広く内外に成果を発信していくという計画で対応した。この対応は今も実行中である。

<研究期間終了後の展望>

1. アジア流域文化研究所の名称変更について。

アジア流域文化研究所は、平成 15～19 年度私立大学オープンリサーチセンター整備事業「アジア流域文化論研究」プロジェクトの事業成果を発展的に継承するために設立されたものであるが、その後の事業推進のなかで研究対象は流域文化分野以外のさまざまな分野に広がり、今回のプロジェクトでその広がりさらには多方面にわたることになった。そこで本プロジェクト開始当初から、期間終了後に研究所の名称から流域を取り去って、名実あいかなう研究所を再創設する目論見であったが、次の事情からその再創設を数年先に先延ばしすることとなった。第一に、数年のうちに大学付置の全研究所について大幅な改組・統廃合が実施されることが予想され、経費・運営上、その改組・統廃合の時期に合わせることを望ましいこと、第二に、現在のアジア流域文化研究所の名称で、今後2年のうちに国内(1件)・国外(2件)の研究機関とシンポジウムを共催することを決定してすでに準備を開始しており、共催終了までは現行の名称のままであるほうが望ましいことである。

2. 課題研究の継続。

すでに述べたように、本プログラムがかかげた「周縁域宗教文化構造」の研究は、必ずしも十分に推進しえたとはいえないのであるが、そもそもこのような重要で大きな課題を十分に処理するには、5年という期間は短すぎるといっても、その理由の一つである。資料の収集・整理に5年、分析と研究に5年と期間を二倍に見積もって、期間中処理しえなかった問題の補完もかねて、今後も周縁域宗教文化構造の研究を継続していく予定である。具体的には、成果報告書としてⅢ号までを刊行した『日中韓周縁域の宗教文化』を、今後少なくともⅧ号まで刊行するとともに、中国・韓国周縁域の現地で数回にわたって国際シンポジウムを共催したいと考えている。

3. 研究分野の拡張。

5ヶ年の活動をへて、本研究所は「アジア諸河川流域の歴史と文化」研究とともに「日中韓周縁域の宗教文化構造」研究を、二つの大きな研究対象とすることとなったのであるが、さらにこれに加えて、「アジアにおける移民とその信仰」研究を三つめの大きな研究対象とし、研究を推進する予定である。この課題は、5ヶ年の研究活動のうちに、研究メンバー全員によってかけられることになったものであり、東日本大震災で移住を余儀なくされた人々の信仰組織や信仰活動を移住先でどう再構築するかという、すぐれて現実的な問題に直面したことも、この課題にいきあたった大きな理由の一つになっている。予定しているプロジェクトの内容は次の通りである。

- 基礎部門。アジア文化史専攻院生の修了者で、東北地方の文化財専門職に就いている者を中心とする現地調査組織をうちたて、東北各地における流入民・移出民の歴史とその信仰の変容を、現地調査を主な手段として考察する。
- 比較部門。琉球諸島・韓国島嶼部・台湾・ベトナム・中央アジア・中国東北部・中国西南部などにおいても上記の考察を実施し、東アジア・東南アジア・中央アジア各地の移民の歴史とその信仰の変容についての、比較史的研究を実施する。

4. 構築された日中韓周縁域史研究ネットワークシステムの稼働。

上にのべた小冊子「東北学院大学アジア流域文化研究所・日中韓周縁域史研究連携システム」

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

を公開するとともに、最新の研究情報を、連携先はもとより、学内外の研究者・研究機関に逐次発信したいと考えている。

<研究成果の副次的効果>

一. 学術上の副次的効果。

1. 東北地方前方後円墳出土遺物における重要な発見。

東北地方古代の埋葬文化とその分布にみられる中央政府の支配圏を考察するために、考古学研究室を中心に前方後円墳の発掘を試みてきたが、会津盆地北部灰塚山古墳の発掘において鉄剣が埋葬されていることが確認された。東北地方の前方後円墳ではほとんど前例を見ないものであり、東北古代の歴史・文化研究に新しい資料を提供することになった。

2. 長江上流域先秦時代歴史地理についての新知見の獲得。

重慶地区をはじめとする長江上流域での現地調査は、少数民族の信仰と祭祀の過去と現状を調査するために実施されたものであるが、その過程で、先秦時代の遺跡・遺物についても重要な知見が数多くえられ、巴族各種族の分布状況とその移動経路・北方殷周文化の進入伝播経路といった、長江上流域先秦時代歴史地理の未解決問題に、重要な新資料を提供することになった。

二. 社会上の副次的効果。

公開行事や文化財復旧・保存活動などを通して、地域住民が中国・韓国周縁域の歴史・文化に関心をもつようになり、自己の歴史意識を中国・韓国と比較相対化して再確認することに、一つのきっかけを提供することになった。中国や韓国において、周縁域の信仰や祭祀はどのような歴史をたどり、現在どのような機能を果たしているか、大災害が発生した場合や大規模な開発によって大量の移住が発生した場合、中央政府の対策に対して現地住民がどのように対応したかなどについて、概略的ではあるけれども一定の認識を提供しえたことは、東北地方の地域住民が、自らの歴史と文化に対する意識のあり方を比較相対化して再確認するにあたって、有効な視点になるものと考えている。

三. 教育上の副次的効果。

アジア文化史専攻の大学院生全員と歴史学科の学部生の多数が、現地調査・文化財の復旧と保存・地域住民からの聞き取りなどにかかわるなかで、コミュニケーション能力を十分に高めることができた。アジア文化史専攻においても歴史学科においても、学外実習や学外調査など、学外ワークを教育内容に取り入れてはいるが、時間上・経費上の制約に昨今の学生気質があいまって、コミュニケーション能力のアップに十分な効果をあげていないのが現状であった。この点、本プログラムに参加した大学院生・学部生にあっては、その効果は十分なものであったと考えている。とくに中国・韓国・日本を問わず、年齢・性別・職業を問わず、現地の住民との座談・討論に時間をかけて取り組むことができたことは、発表・研究など教育・授業の場での資質の涵養のみでなく、一個の社会人としてのあるべきコミュニケーション能力の涵養に、大きな役割を果たした。アジア文化史専攻修了生が東北各地の文化財専門職に就職しえたのも、民俗・考古などの学部生の多くがしかるべき職種に就職しえたのも、このコミュニケーション能力が選抜・採用にあたって一つの大きな効力を発揮したものと理解している。

[自己評価の総括]

文学部歴史学科・経済学部の教員の多くは、東北地方の歴史・文化・経済において豊富な研究蓄積を有している上に、アジア各地のそれらについても相応の研究蓄積を有しており、その蓄積を共同研究の形でより有用に活用すべきであること、仙台は中央と東北周縁域の結節点にして周縁域の文化・経済を集約する拠点でもあり、その地の利をいかして東北周縁域史の研究を推進すべきであること、その場合、比較対象としてアジア各地の周縁域史をとりあげ、同じ周縁域の住民意識に注目することによって、比較史的研究をより一層有効に推進すべきであること、情報機器の完備と仙台—中国・韓国の移動が経費上・時間上容易であることをいかして、仙台に日中韓周縁域史研究の研究拠点を構築すべきであること、その拠点の機能は大学院生・学部生及び各地の研究者・研究機関・一般市民にも提供されるべきであること、こういった戦略のもとに推進された本プ

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

プロジェクトの事業成果は、一～六の計画展開については達成度7割5分ではあるけれども、「戦略的研究基盤形成支援事業」の主旨に照らして、全体としては8割であると自己評価している。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 日中韓周縁域 (2) 宗教文化構造 (3) 長江上流周縁域
 (4) 韓国島嶼部周縁域 (5) 東北沿岸周縁域 (6) 周縁域住民の歴史意識
 (7) 周縁域の民族と宗教 (8) 災害と信仰

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

本項においては、機関誌であるアジア流域文化研究所年報『アジア流域文化研究』Ⅹ・Ⅹと『日中韓周縁域の宗教文化』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ及び成果の一部が掲載されたアジア文化史専攻年報『アジア文化史研究』13・14・16・17と『東北学院大学論集・歴史と文化』50・53に掲載した関連論文をまず列挙し、ついで、これ以外の他の学術誌などに掲載された論文を、10:研究プロジェクトに参加する主な研究者の順に列挙する(一人2篇まで)。なお、(*数字)は11(4)のそれぞれに対応している。※(有)を付したものは「査読有り」論文。

『アジア流域文化研究』Ⅹ。(2013年3月)

- 楊 華:長江三峡地区における太古の時代の埋葬習俗(水盛涼一訳)、pp7~36。
- 細谷良夫:長江上流・大渡河流域の旅—瀘定河・打箭爐・雅州、pp56~76。

『アジア流域文化研究』Ⅹ。(2014年3月)。

- 李禹階:重慶移民史研究におけるいくつかの問題(谷口満訳)、pp7~48。(*17)。
- 加藤幸治:文化財産的現場抢救工作(張毅訳)、pp49~53。(*15、*24)

『日中韓周縁域の宗教文化』Ⅰ。(2015年3月)。

- 谷口満:湖北長陽香炉石遺址の性質—宗教的機能と軍事的機能—、pp7~22。
- 榎森進:アイヌ民族史研究30年、pp55~58。
- 熊谷公男:古代蝦夷(エミシ)の生業と社会、pp59~62。(*1)
- 政岡伸洋:韓国濟州島の祭祀民俗、pp63~66。(*7、*8)
- 佐々木拓哉(大学院生):東北地方における古墳時代の異文化交流、pp67~69。
- 郭儒哲:韓国西南部の製塩方法と塩業民俗(洪惠媛訳)、pp73~93。(*14)。
- 鄧 暁:長江三峡の産塩地と塩神信仰(水盛涼一訳)、pp95~107。(*14)。

『日中韓周縁域の宗教文化』Ⅱ。(2016年3月)。

- 熊谷公男:古代国家北縁の二つの境界—栗原市入の沢遺跡の発見によせて—、pp33~51。(*2)
- 谷口満:丹江再訪記—過鳳樓陶甬と過鳳樓文化—、pp53~66。
- 小沼孝博:シンポジウム報告・国際会議“Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations” 参加報告、pp67~72。(*11)。

『日中韓周縁域の宗教文化』Ⅲ。(2017年3月)。

- 李禹階:中国重慶地域の移民とその信仰(陳穎訳)、pp7~13。(*18)
- 山澤学:木食行者鐵門海—出羽三山の即身仏と仙台藩領の信仰—、pp15~26。
- 菅原純:ウイグル人のマザール—現代「シルクロード」における聖地と信仰—、pp27~62。(*12)。

『アジア文化史研究』13。(2013年3月)。

- 太田美由紀・佐藤佳子(大学院生):(調査報告)ロシア・ハバロフスクの民族博物館、pp23~24。(*13)
- 熊谷明希(大学院生):九州南部に残る隼人史研究資料、pp35~40。
- 王寧暁:恩施地域における碑刻資料の保存と研究について(趙力傑訳)、pp45~56。(*6)。
- 雷 翔:清江上流の土家族における「還壇神」祭祀について(趙力傑訳)、pp57~62。(*6)。
- 政岡伸洋:韓国濟州島の宗教儀礼、pp63~78。(*7、*8)。
- 熊谷明希他(大学院生):(調査報告)中国重慶地区における考古・民俗調査、pp79~88。(*22)。

『アジア文化史研究』14。(2014年3月)。

- 沼田愛(大学院生):(調査報告)2012年度韓国濟州島ヨンドウングツに関する調査と意義、pp29~34。(*7、*23)。
- 遠藤健悟他(大学院生):(調査報告)韓国濟州島におけるヨンドウングツの展開、pp35~50。(*7、*23)。

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

26. 沼田愛(大学院生):(調査報告)鹿児島県硫黄島の八朔行事の調査とその課題、pp51～58。(＊9)。
27. 遠藤健悟(大学院生):(調査報告)トカラ列島悪石島における盆と仮面劇、pp59～66。(＊9)。
28. 大沼知(大学院生):(調査報告)薩南諸島における暮らしの諸相、pp67～72。(＊9)。
29. 小山悠(大学院生):(調査報告)鹿児島・薩南諸島の生活探訪記、pp73～78。(＊9)。
30. 丸山和央(大学院生):(調査報告)三島村硫黄島における生業の展開、pp79～84。(＊9)。
- 『アジア文化史研究』16。(2016年3月)。
31. 安保智他(大学院生):(調査報告)中国貴州省における民俗調査、pp33～46。(＊22)。
- 『アジア文化史研究』17。(2017年3月)。
32. 諭学忠:宋元時代重慶地区の移民とその民間信仰(谷口満訳)、pp1～26。(＊18)。
33. 遠藤健悟他(大学院生):(調査報告)中国重慶市における少数民族に関する資料調査、pp39～50。(＊22)。
- 『東北学院大学論集・歴史と文化』50。(2013年3月)。
34. 管維良:重慶の歴史と文化(水盛涼一訳)、pp5～13。
35. 蔣剛:考古資料からみた先秦三峡地域の東西文化交流について(周曉萌・時堅訳)、pp15～32。
36. 金容民:栄山江流域の最近の考古学的調査の成果について(崔英姫・佐川正敏訳)、pp33～51。
37. 佐川正敏・崔英姫:6世紀中葉(泗泚期百濟)以後の韓国栄山江流域、pp53～59。
38. 熊谷公男:古代蝦夷論の再構築に向けて、pp(1)～(20)。(＊1)。
- 『東北学院大学論集・歴史と文化』52。(2014年3月)。
39. 牛英彬:重慶東南郁江流域塩業遺址の発掘と研究(時堅訳)、pp143～172。
40. 王青:西周時代の山東省南河崖製塩遺跡の考古学発見と研究(楨林啓介訳)、pp173～180。
41. 白九江:四川盆地における古代の塩業技術—考古遺跡や遺物を焦点として—(水盛涼一訳)、pp181～208。
-
42. 谷口満:(有)黔江虎鈕錚于の内函考証、重慶市歴史地理專業委員会『重慶市歴史地理專業委員会第八屆歴史地理年會論文集・丹砂神韻』、pp53～66、2016年。(＊5、＊6)。
43. 谷口満:(有)談談奉節永安鎮与涪陵小田溪出土的珍奇巴文化青銅器、夔州文化及重慶歴史地理專業委員會『第六屆年會論文集』、pp523～527、2012年。(＊6)。
44. 熊谷公男:節会に参加する蝦夷、『講座東北の歴史第3巻・境界と自他認識』、pp246～271、2013年。(＊1、＊2)。
45. 熊谷公男:蝦夷とは何か—文献史学の立場から—、『骨考古学と蝦夷・隼人』、pp1～18、2012年。(＊1、＊2)。
46. 七海雅人:板碑造立の展開と武士団—陸奥国白河庄・石川庄の事例から—、中島圭一編『十四世紀の歴史学』、pp109～138、2016年。(＊3)。
47. 七海雅人:中世松島の世界、三井記念美術館特別展図録『松島・瑞巖寺と伊達政宗』、pp112～117、2016年。(＊3、＊20)。
48. 菊池慶子:仙台藩の防潮林と村の暮らし、徳川林政史研究所『森林の江戸学』Ⅱ、pp136～150、2015年。
49. 菊池慶子:大名家『女使』の任務—仙台藩伊達家を中心に、総合女性史学会編『女性官僚の歴史』、pp102～125、2013年。
50. 河西晃祐:東北学院に残された学徒出陣資料について、『東北学院資料室』13号、pp2～5、2014年。
51. 河西晃祐:東北移民史研究の諸問題、『講座東北の歴史第4巻』、pp333～352、2012年。(＊2)。
52. 下倉 渉:(有)ある女性の告発をめぐって—岳麓書院蔵秦簡「識劫媿案」に現れたる奴隸および「舎人」「里単」—、『史林』99-1、pp49～90、2016年。
53. 辻 秀人:3、4世紀の陸前の集落と古墳、『邪馬台国シンポジウム 15・邪馬台国時代のみちのくと大和・資料集』、pp47～62、2015年。(＊2)。
54. 辻 秀人:東北における古墳出現期の社会変動と南北境界、『講座東北の歴史第3巻・境界と自他の認識』pp16～35、2013年。(＊2)。
55. 佐川正敏:考古学からみた仏教文化東漸の諸相と仏都平泉の形成、『平泉文化研究年報』17号、pp1～14、2017年。(＊19)。
56. 政岡伸洋:被災地とのかかわりからみえてきたもの—宮城県本吉郡南三陸町波伝谷での経験から—、『災害文化の継承と創造』、pp189～210、2016年。(＊15、＊16)。
57. 政岡伸洋:被災地でなぜ民俗芸能や祭りが必要だったのか?、『民博通信』142、pp10～11、2013年。(＊15、＊16)。
58. 加藤幸治:津波常襲地における技術の断絶と継承、『南山大学人類学研究所・研究論集』4号、2016年。
59. 加藤幸治:モノに立脚した新たな比較文化論の構築にむけて、『国際常民文化研究叢書』第3号 pp189～193、2013年。(＊15、＊16、＊21)。

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

60. 小沼孝博：(有)瓜州トルファン人社会—清の領域拡大の最前線、『西南アジア研究』85 巻 pp18～39、2016 年。(* 11)。
61. 小沼孝博：(有)トルファン・オアシス社会の分断—清とジュンガールの狭間で—、『歴史と地理』686 号、pp1～14、2015 年。(* 11)。
62. 仁昌寺正一：近代の仙台を中心とした市場形成、『仙台郷土研究』291 号、pp1～8、2015 年。
63. 千葉昭彦：(有)世界遺産と地域経済—平泉の観光・まちづくりを対象として—、『経済地理学年報』60-2 号、pp71～79、2014 年。
64. 齋藤善之：南東北における歴史資料調査のあゆみと東日本大震災、国立文化財機構『第2回全国史料ネット研究交流集会報告書』、pp56～62、2016 年。
65. 竹井英文：(有)戦国期の北信濃と大野田城、『武田氏研究』50、pp1～16、2014 年。

<図書>

以下には一人の執筆にかかる単著のみをあげる。

1. 菊池慶子：『仙台藩の海岸林と村の暮らし』、蕃山坊出版、総 74 ページ。2016 年。
2. 河西晃祐：『大東亜共栄圏—帝国日本の南方体験』、講談社、総 317 ページ。2016 年。
3. 加藤幸治：『復興キュレーション—語りのオーナーシップで伝える“くじらまち”—』、社会評論社、総 254 ページ。2017 年。(* 15、* 16、* 24)。
4. 小沼孝博：『清と中央アジア草原—遊牧民の世界から帝国の辺境へ—』、東京大学出版会、総 311 ページ。2014 年。(* 11)。
5. 齋藤善之：『八幡(宮城県仙台市)の暮らしと商いの記憶』、私家版、総 262 ページ。2013 年。(* 4)。

<学会発表>

以下には一人あたり2回までの発表を列举する。

1. 谷口満：関于巴史巴文化研究方法的幾点思考、五省市巴文化研究会(中国重慶市)。2013 年 12 月。(* 5、* 6)。
2. 谷口満：虎鈕錡于盤部図案畢竟示什麼？、重慶市歴史地理專業委員会第八屆年会(中国重慶市)。2016 年 6 月。(* 5、* 6)。
3. 熊谷公男：古代蝦夷の居住域と文化—蝦夷(エミシ)の実像に迫る、上代文学会大会公開講演(福島市)。2016 年 5 月。(* 1、* 2)。
4. 七海雅人：中世本吉・気仙沼の論点—歴史学の立場から—、宮城県考古学研究会(仙台市)。2016 年 5 月。(* 3)。
5. 菊池慶子：近世東北の海岸防災林、史学会リレーシンポジウム「東北史を開く」(福島市)。2014 年 10 月。(* 15、* 16)。
6. 河西晃祐：地域・軍隊・学校資料—学都仙台と東北学院—、全国大学資料協議会(東京)、2015 年 10 月。
7. 河西晃祐：「植民地支配」と「アジア解放」のはざまに—大東亜共栄圏とは何だったのか、上智大学アジア文化研究所講演会(東京)。2016 年 12 月。
8. 下倉渉：秦代の密通事件をめぐって、中国女性史研究会(東京)、2016 年 2 月。
9. 辻 秀人：山元町の復興調査成果から古代東北の歴史を考える、宮城県考古学研究会発表会(仙台市)。2015 年 5 月。(* 2)。
10. 佐川正敏：最近の東アジアの研究成果から見た飛鳥寺、飛鳥資料館記念講演会(桜井市)、2013 年 5 月。(* 19)。
11. 佐川正敏：考古学からみた「平泉」における文化的伝統の形成、アジアにおける平泉文化研究会(奥州市)。2015 年 11 月。(* 19)。
12. 政岡伸洋：祭礼の見方・考え方—盛岡八幡宮例大祭の山車行事を中心に—、もりおか歴史博物館特別講演会(盛岡市)。2014 年 2 月。(* 2)。
13. 政岡伸洋：仙台藩はなぜ盆踊りを禁止したのか？のナゾ、秋桜会定例会(仙台市)。2014 年 8 月。(* 2)。
14. 加藤幸治：東北発・市民がつくる復興のかたち、京都外国語大学博物館課程交流会記念講演(京都市)。2014 年 10 月。(* 15、* 16)。
15. 加藤幸治：牡鹿半島における震災復興と食の文化資源化、日本民俗学会第 67 回年会(西宮市)。2015 年 10 月。(* 15、* 16)。
16. 小沼孝博：18 世紀前半におけるトルファン人の瓜州移住、河西走廊における民族の移動と地域像の変容研究会(京都)。2015 年 7 月。(* 11)。
17. 小沼孝博：清朝と新疆のムスリム臣民、東北大学東北アジア研究センター記念シンポジウム(仙台市)。2015 年 12 月。(* 11)。

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

18. 千葉昭彦:世界遺産と地域経済、経済地理学会一関・平泉大会(一関市)。2013年10月。
 19. 齋藤善之:千田家の系譜と地域社会への貢献、三陸古文書調査研究会(大船渡市)。2014年8月。(＊4)。
 20. 竹井英文:城郭研究の現在、白河館まほろん記念関連シンポジウム・城跡を掘る(白河市)。2016年10月。

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<既に実施しているもの>

一. 公開シンポジウム・学会など。

主催・共催したシンポジウム・学会などはのべ29回であるが、ここには本プログラムの課題に直接かかわるものだけを挙げる。その他のものをふくむ29回それぞれの内容については、『研究成果報告書』付載の「公開行事一覧」に掲載している。

1. 学術研究会「地域文化研究と地域博物館」。

2012年12月13日(木)於東北学院大学。

・調査報告。

- a. ロシア・ハバロフスクの民族博物館 太田美由紀・佐藤佳子(東北学院大学大学院生)。
- b. 巴蜀地区の春秋戦国時代製鉄遺跡 劉前鳳・王茜(重慶師範大学大学院生)。
- c. 九州南部に残る隼人史研究資料 熊谷明希(東北学院大学大学院生)。

・保存と研究。

- a. 重慶師範大学博物館の運営と課題 丁建華(重慶師範大学博物館館員)。
- b. 恩施自治州土家族地区に残る墓碑の調査と研究 王晓寧(恩施自治州博物館副研究館員)。
- c. 清江上流地区の奇祭・還壇神 雷翔(湖北民族学院南方少数民族研究センター教授)。
- d. 韓国済州島の宗教儀礼 政岡伸洋(東北学院大学文学部教授)。

・講評 楊華(重慶師範大学歴史与社会学院教授)。

2. 公開国際シンポジウム「日中韓周縁域史研究ことはじめ」。

2012年12月15日(土)於東北学院大学。

・基調講演。

重慶の歴史と文化 管維良(重慶師範大学歴史与社会学院教授)。

・講演。

- I. 考古資料からみた先秦三峡地区の東西文化交流 蔣剛(重慶師範大学歴史与社会学院教授)。
- II. 古代蝦夷研究の歩み 熊谷公男(東北学院大学文学部教授)。

・座談。

韓国栄山江流域の考古発掘成果をめぐって。

崔英姫(韓国江陵原州大学院人文学部講師)。

佐川正敏(東北学院大学文学部教授)。

金容民(韓国国立扶余文化財研究所研究員)。

3. 公開国際学術シンポジウム「日中韓周縁域の塩神信仰」。

2014年11月1日(土)於東北学院大学。

・解説。

谷口満(東北学院大学文学部教授)。

・調査報告。

宮城県沿岸部の塩神神社 星洋和(東北学院史資料センター非常勤職員)。

・講演。

- I. 中世の塩竈と塩竈大明神 七海雅人(東北学院大学文学部教授)。
- II. 韓国西南部の製塩方法と塩業民俗 郭儒哲(韓国国立海洋文化財研究所研究員)。
 通訳 洪恵媛(東北大学大学院生)。
- III. 長江三峡の産塩地と塩神信仰 鄧曉(重慶師範大学歴史与社会学院教授)。
 通訳 水盛涼一(東北大学文学研究科助教)。

4. 公開学術講演会「日中韓周縁域の宗教と神話」。

2015年11月28日(土)於東北学院大学。

・講演。

I. 琉球弧における奄美仏教の特徴 財部めぐみ(鹿児島大学共通教育センター講師)。(＊10)。

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

- Ⅱ. 貴州儼文化をめぐるいくつかの問題 陳玉平(貴州民族大学西南儼文化研究院教授)。
 通訳 三田辰彦(東北大学文学研究科専門研究員)。
 Ⅲ. 済州・沖縄・中国少数民族創世神話の比較研究 許南春(韓国済州大学校人文大学教授)。
 通訳 李春淑(韓国漢拏大学校観光日本語科講師)。

5. 公開講演会「日中韓周縁域における信仰のありかた」。

2016年11月26日(土)於東北学院大学。

・講演。

- Ⅰ. 中国重慶地区の移民とその信仰 李禹階(重慶師範大学歴史与社会学院教授)。
 通訳 陳穎(東北大学大学院生)。
 Ⅱ. 韓国の宗教構造と民間信仰—民衆の信仰から民族の文化へ—
 岡田浩樹(神戸大学大学院国際文化学術研究科教授)。(＊8)
 Ⅲ. アイヌ葬送儀礼の復活 葛野次雄(コタンの会副会長)。
 葛野大喜(札幌大学学生)。
 平田剛士(フリーランス記者)。

6. 国際学術シンポジウム「日中韓周縁域の考古文化と民俗文化」。

2013年10月21日(日)於重慶師範大学。

・開会挨拶。

- Ⅰ. 李禹階(重慶師範大学歴史与社会学院教授・三峡文化与社会発展研究院院長)。
 Ⅱ. 平河内健治(東北学院理事長)。
 Ⅲ. 谷口満(東北学院大学アジア流域文化研究所所長)。

・研究報告(午前)。

- Ⅰ. 郁山温泉と巴国の興衰 管維良(重慶師範大学歴史与社会学院教授・中国語)。
 Ⅱ. アイヌ民族史研究三十年 榎森進(東北学院大学文学部教授・日本語)。
 Ⅲ. 古代清江流域の民族文化 楊華(重慶師範大学歴史与社会学院教授・中国語)。
 Ⅳ. 古代蝦夷の生業と文化 熊谷公男(東北学院大学文学部教授・日本語)。
 Ⅴ. 巫巴山地の巫文化 鄧暎(重慶師範大学歴史与社会学院教授・中国語)。
 Ⅵ. 韓国済州島の祭祀民俗 政岡伸洋(東北学院大学文学部教授・日本語)。

・研究報告(午後)。

特別報告 東アジア大陸晩期旧石器文化の南北差異とその東部辺境旧石器文化との関係。

- Ⅰ. 長江上流の古人類と旧石器文化 武仙竹(重慶師範大学歴史与社会学院教授・中国語)。
 Ⅱ. 韓半島晩期旧石器文化の特徴とその早中期旧石器文化との関係
 李起吉(韓国朝鮮大学校教授・韓国語)。
 Ⅲ. 日本列島晩期旧石器文化の特徴とその大陸・半島との関係
 佐川正敏(東北学院大学文学部教授・中国語)。

院生報告

- Ⅰ. 三峡地区西周・東周時期瓦財の考古発現と研究 粟慧(重慶師範大学大学院生・中国語)。
 Ⅱ. 東北地方における古墳時代の異文化交流 佐々木拓哉(東北学院大学院生・日本語)。

・閉会講評。

- 常雲平(重慶師範大学歴史与社会学院院长)。
 辻秀人(東北学院大学博物館館長)。

二. インターネットでの公開状況など。

東北学院大学アジア流域文化研究所ホームページ www.ipc.tohoku-gakuin.ac.jp/~hicarb/

東北学院大学ホームページ www.tohoku-gakuin.ac.jp/

以上二箇所のホームページと学校法人東北学院『東北学院時報』(毎月発行)によって、公開行事・研究成果などを逐次公開している。

<これから実施する予定のもの>

すでに開催を決定しているものを列挙する。

一. 公開シンポジウム・学会など。

1. 2017年9月に「長江流域の歴史と文化」に関する国際シンポジウムを、長江大学と共催し湖北省荊州市で開催。

・本学参加予定者と演題。

- 谷口満: 先秦時期的荊州。
 下倉涉: 秦漢時期荊州地区的商業。

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

<p>佐川正敏:長江流域瓦材の考古学研究。 細谷良夫:清朝時期的荊州。 政岡伸洋:東亜細亜的巫俗。</p> <p>2. 2017年11月に「周縁域の信仰」に関するシンポジウムを、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターと連携して東北学院大学で開催。</p> <p>・予定している内容。 基調講演「鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの研究活動」(センター長)。 専題講演Ⅰ「中国沿海部の民俗と沖縄・琉球列島の民俗」(仮題)。 専題講演Ⅱ「韓国島嶼部の民俗と九州南西諸島の民俗」(仮題)。 調査報告「中国塩神廟調査報告」(仮題)。</p> <p>3. 2018年9月に「長江中流域の歴史地理」に関する国際シンポジウムを、武漢大学・カリフォルニア大学ロサンゼルス校と共催し湖北省武漢市で開催。</p> <p>・内容については、現在策定中である。</p> <p>二. インターネットでの公開など。 アジア流域文化研究所・東北学院大学のホームページおよび『東北学院時報』を活用するとともに、「日中韓周縁域史研究連携システム」の専用サイトを立ちあげ、公開行事・研究情報の内容を逐次発信していく予定である。</p>

14 その他の研究成果等

<p>1. 中国・韓半島・日本列島旧石器文化の様相と相互比較について、中国・韓国・日本の第一線の研究者による共同研究を実施し、学界に新しい知見を提供することができた。(上掲公開シンポジウム・学界などの項6の特別報告)。</p> <p>2. 2016年11・12月に、日本学術振興会外国人研究者招へい事業・外国人招へい研究者(短期)により、武漢大学徐少華教授を招致し(受入研究者・谷口満)、周縁域史研究における歴史地理学上の方法について新しい知見を獲得することができた(この成果については谷口満「徐少華教授の歴史地理研究」と題した報告でもって、2018年3月に公表される予定である)。</p>

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<p><「選定時」に付された留意事項> 留意事項:「周縁地域」「復原」などのワードの定義、地域選定の合理的説明などに留意されたい。</p> <p><「選定時」に付された留意事項への対応> 1. 「周縁地域」(本プロジェクトではもっぱら「周縁域」という表示を使用している)という表記は、歴史や文化の研究においてしばしば使用されるが、その概念は研究者によってさまざまである。本プロジェクトでは、次のような条件を備える地域を周縁域とみなし、研究を実施してきた。一. 長期にわたって中央政権に匹敵するような地方政権が存在しなかったこと。二. 中央政権がそこを支配する場合、近畿地方とは異なった行政制度・徴税制度などが施される場合が多かったこと。三. 歴史的にみて、農業生産は必ずしも優勢ではなく、漁労・特産品生産などが重要な生業となっていたこと。四. 言語・風習などにおいて、中央-近畿地方とは明らかに異なった様相が見られること。もちろん、これ以外の条件もいくつか考慮しなければならないが、本プロジェクトで対象とする「周縁域」は、少なくともこの四条件を満たしていることを前提とした。</p> <p>2. 「復原」とは、資料を本来の形態にもどすことである。文字資料についていえば、その文字が長年月の間に消滅した場合、それを化学処理などによって判読可能な状態にすること、器物資料についていえば、破損したものを物理的に完器の状態にもどすことが、そういった例である。むしろ「復元」という表記が適切かも知れない。</p>

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

3. 東北地方・長江上流域・韓国島嶼部をおもな研究対象地域として設定したのは、研究メンバーが、この地域についてすでに相応の研究蓄積をもっており、研究の推進に有用であると考えたためである。ただ、無意味にこの三地域を並べたのではもちろんなく、たとえば、東北地方と長江上流域を比較検討の対象として選定したのは、海運の北の拠点である石巻—その北の水運ルートである北上川—その北に分布した蝦夷やアイヌ民族という地勢と、長江水運の西の拠点である重慶—その南にある烏江の水運ルート—その南に分布した西南少数民族という地勢が類似しており、比較検討に適切だと考えたためである。

また、プログラム期間中に、この三地域以外の周縁域を追加することを予定したことはいうまでもないことであり、九州南部島嶼部・中国西北部—ウイグル地区などを対象に加えて比較研究を実施した。同じ日本の周縁域であっても、大陸の周縁としての性格をより強くもつ九州南部島嶼部と東北地方では、その歴史と文化の様相に無視できない相違が存在すること、同じ中国の周縁域であっても、長江上流域と中国西北部—ウイグル地区では、少数民族支配のありかたに無視できない相違が存在することを再確認することができたのは、成果の一つである。

<「中間評価時」に付された留意事項>

留意事項: 自己評価にも述べられている通り、目的にかかげた宗教文化についての調査と研究がやや遅れているように見受けられる。

留意事項: 出版の体制など整っているが、学内誌といえども査読制を導入すべきであろう。

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

1. 宗教文化構造への研究の収束は、必ずしも十分ではなかった。上掲<課題となった点>で指摘した通りである。ただ上掲3・4・5のシンポジウムなどによって、宗教文化構造の比較についてある程度の考察を行い、今後の研究推進への一つの前提を築くことだけはできたと自己評価している。今後、数年のうちに関連業績を公表したいと考えている。

2. 学内誌の場合、投稿論文を収受する場合に、編集委員が内容についても当否の判定を行っている。ただ、それが“査読”かどうかとなると、本格的な判定から形式的な判定まで、バラツキが大きいのが実情である。本プログラム研究成果の掲載に当たっては、研究代表者が事前に十分吟味したつもりであるが、なお客観的な査読を実施するよう、大学関係部門はたらしかけていきたいと考えている。

法人番号	041002
プロジェクト番号	S1291008

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成24年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	8,830	4,839	3,991				
平成25年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	8,650	5,438	3,212				
平成26年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	8,769	4,884	3,885				
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	9,136	4,717	4,419				
平成28年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	9,095	5,099	3,996				
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	0	0	0	0	0	0	0
	研究費	44,480	24,977	19,503	0	0	0	0
総計	44,480	24,977	19,503	0	0	0	0	

法人番号	041002
------	--------

17 施設・装置・設備の整備状況（私学助成を受けたものはすべて記載してください。）

《施設》（私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。）（千円）

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
アジア流域文化研究所	平成20年度	53.93m ²	1	45(週)	0	0	
東北学院大学博物館	平成20年度	300m ²	1	35(週)	32,623	0	
アジア文化史専攻合同研究所	平成13年度	53m ²	1	45(週)	0	0	

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

_____ m²

《装置・設備》（私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。）

（千円）

装置・設備の名称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
				h			
				h			
				h			
				h			
(研究設備)				h			
				h			
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況

（千円）

年 度	平成 24 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消耗品費	421	研究用消耗品	古文書袋等 用品費(316含む)
光熱水費	0		
通信運搬費	129	シンポジウム案内送料	シンポジウム郵便料、宅配便料
印刷製本費	0		
旅費交通費	4,983	調査研究等旅費	調査研究等旅費、シンポジウム講師招聘旅費・宿泊費
報酬・委託料	754	シンポジウム講師謝礼	シンポジウム講師謝礼・交通費
(雑費)	333	海外調査協力報酬費	海外調査協力報酬費、シンポジウム昼食・茶菓代
()			
計	6,620		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出	910	公開講演会、公開シンポジウムアルバイト	学部生時給680円(10月から690円)、院生時給875円
(兼務職員)			学部生(17)人 総時間数(119)時間
教育研究経費支出	0		院生等(33)人 総時間数(948)時間
計	910		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	0		
図 書	1,300	研究用図書	漢画文献集成 第2巻他
計	1,300		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	0		
ポスト・ドクター	0		
研究支援推進経費	0		

		法人番号	041002
計	0		

(千円)

年度		平成 25 年度	
小科目	支出額	積算内訳	
		主な用途	金額
教育研究経費支出			
消耗品費	78	研究用消耗品	古文書袋等
光熱水費	0		
通信運搬費	69	シンポジウム案内送料	講演会・シンポジウム案内送料
印刷製本費	399	講演会等ポスタ	公開講演会・シンポジウムポスター・チラシ印刷
旅費交通費	5,092	調査研究等旅費	調査研究等旅費、シンポジウム講師招聘旅費・宿泊費
報酬・委託料	689	シンポジウム講師謝礼	シンポジウム講師謝礼・交通費
(雑費)	330	海外調査協力報酬費	海外調査協力報酬費、シンポジウム昼食・茶菓代
(賃借料)	0		
(用品費)	362	研究用用品費	デジタル一眼レフカメラ、防水型自動レベルB20
計	7,019		
アルバイト関係支出			
人件費支出 (兼務職員)	1,026	公開講演会、シンポジウム研究補助等アルバイト	学部生時給690円(11月から700円)、院生時給875円 学部生(25)人 総時間数(319)時間
教育研究経費支出	0		院生等(27)人 総時間数(920)時間
計	1,026		
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	0		
図書	605	研究用図書	中華人民共和国国家歴史地図集他
計	605		
研究スタッフ関係支出			
リサーチ・アシスタント	0		
ポスト・ドクター	0		
研究支援推進経費	0		
計	0		

(千円)

年度		平成 26 年度	
小科目	支出額	積算内訳	
		主な用途	金額
教育研究経費支出			
消耗品費	100	研究用消耗品	SDカード、USB、ファイル等
光熱水費	0		
通信運搬費	42	シンポジウム案内送料	講演会・シンポジウム案内送料
印刷製本費	410	シンポジウムポスター・チラシ印刷費	講演会・シンポジウムポスター・チラシ印刷
旅費交通費	5,430	調査研究等旅費	調査研究等旅費、シンポジウム講師招聘旅費
報酬・委託料	427	シンポジウム講師謝礼	講演会・シンポジウム講師謝礼・交通費、通訳・翻訳報酬料
(雑費)	324	海外調査協力報酬費	海外調査協力報酬費、講演会・シンポジウム昼食・茶菓代
(賃借料)	0	会場使用料	会場使用料
(用品費)	269	研究用用品費	SurFacePro3マイクロソフト
計	7,002		
アルバイト関係支出			
人件費支出 (兼務職員)	1,146	講演会、シンポジウム研究・事務補助等アルバイト	学部生時給700円(10月から715円)、院生時給875円 学部生(50)人 総時間数(651)時間
教育研究経費支出	0		院生等(20)人 総時間数(785)時間
計	1,146		
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	0		
図書	621	研究用図書	中印佛教造像源流与伝播、湖南商周青銅器研究等
計	621		
研究スタッフ関係支出			
リサーチ・アシスタント	0		
ポスト・ドクター	0		
研究支援推進経費	0		
計	0		

法人番号	041002
------	--------

(千円)

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	75	研究用消耗品	ファイル、SDカード、USB
光 熱 水 費	0		
通 信 運 搬 費	82	シンポジウム案内送料	講演会・シンポジウム案内送料、郵便料、はがき
印 刷 製 本 費	540	シンポジウムポスター・チラシ印刷費	講演会・シンポジウムポスター・チラシ印刷
旅 費 交 通 費	5,675	調査研究等旅費	調査研究等旅費、シンポジウム講師招聘旅費
賃 借 料	157	会場使用料	会場使用料
報 酬 ・ 委 託 料	677	シンポジウム講師謝礼	講演会・シンポジウム講師謝礼・交通費、通訳・翻訳報酬料
(渉 外 費)	26	講演会・シンポジウム昼食代・茶菓代	講演会・シンポジウム昼食・茶菓代
(雑 費)	175	海外調査協力報酬費	海外調査協力報酬費
(用 品 費)	167	研究用用品費	スキャナ
計	7,574		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出 (兼 務 職 員)	1,152	講演会・シンポジウム、研究・事務補助等アルバイト	学部生時給715円(10月から730円)、院生時給875円 学部生(17)人 総時間数(250)時間
教 育 研 究 経 費 支 出			院生等(28)人 総時間数(998)時間
計	1,152		
設 備 関 係 支 出 (1 個 又 は 1 組 の 価 格 が 5 0 0 万 円 未 満 の も の)			
教 育 研 究 用 機 器 備 品			
図 書	410	研究用図書	秦簡牘合集 I 上・中・下等
計	410		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント			
ポスト・ドクター			
研究支援推進経費			
計	0		

(千円)

年 度	平成 28 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	117	研究用消耗品	Chinese Writer11、USB、インクカートリッジ等
光 熱 水 費	0		
通 信 運 搬 費	200	シンポジウム案内送料	講演会・シンポジウム案内送料、郵便料、はがき
印 刷 製 本 費	615	シンポジウムポスター・チラシ印刷費	講演会・シンポジウムポスター・チラシ印刷
旅 費 交 通 費	5,139	調査研究等旅費	調査研究等旅費、シンポジウム講師招聘旅費
賃 借 料	42	会場使用料	会場使用料
報 酬 ・ 委 託 料	889	シンポジウム講師謝礼	講演会・シンポジウム講師謝礼・交通費、通訳・翻訳報酬料
(渉 外 費)	30	講演会・シンポジウム昼食代・茶菓代	講演会・シンポジウム昼食・茶菓代
(雑 費)	216	海外調査協力報酬費	海外調査協力報酬費
(用 品 費)	160	研究用用品費	Endeavor
計	7,408		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出 (兼 務 職 員)	1,157	講演会・シンポジウム、研究・事務補助等アルバイト	学部生時給730円(10月から750円)、院生時給875円 学部生(53)人 総時間数(376)時間
教 育 研 究 経 費 支 出			院生等(25)人 総時間数(1,008)時間
計	1,157		
設 備 関 係 支 出 (1 個 又 は 1 組 の 価 格 が 5 0 0 万 円 未 満 の も の)			
教 育 研 究 用 機 器 備 品			
図 書	530	研究用図書	漢魏晋南北朝時代の都城と陵墓の研究等
計	530		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント			
ポスト・ドクター			
研究支援推進経費			
計	0		